

国後島訪問記



井澗 裕

ロウソク岩付近からラウス山遠景

1. はじめに

僕は道東の港町・釧路で生まれたので、小さいころから何度も北方領土を目にしてきた。国後島を始めて見たのは、家族みんなで知床半島・羅臼の温泉旅館に向かう途中だった。その青霞みした山並みの美しさはちょっとした驚きだった。その時から「国後島に行くこと」は僕にとって小さな夢の一つだった。もちろん、納沙布岬から望遠鏡で水晶島を眺めたこともあった。すぐ目の前にある島が「ソ連」だとは信じられなかった。今でも覚えているのは、レンズ越しに見たミリタリーグレーのソ連の哨戒艇の様子だ。それは狭い海峡を遊弋し、甲板には小銃を抱えて立つソ連兵の姿があった。小学生だった僕には、ブリッジのキリル文字がやけに恐ろしく見えたものだ。今にして思えば、あれが僕にとって最初の「ロシア体験」だった。それはまだソ連が「北の脅威」だった時代のことだ。

2012年9月、ビザなし訪問団の一員として国後島を訪れることになり、小さな夢がかなうことになった。もうソ連はすでに存在しないが、それでも領土問題は解決していない。そんな状態で国後島を訪れることになるとは、夢にも思っていなかった。僕の参加することになった訪問団は、「後継者」という枠組みで組まれたものだ。戦後もすでに67年を経過し、北方領土の旧島民は高齢化が進んでいるため、返還運動の後継者を育成する必要がある——という趣旨で編成されたものだ。そのため、同行したメンバーは旧島民の3世や大学生などが中心で、要するに若者が多かった。

そのせいなのか、訪問スケジュールは予想以上にハードだった。

9月6日に根室に集合し、夕方まで事前研修会がおこなわれる。翌7日に根室を出航し、国後島へ向かう。8日と9日の2日間は視察と交流の予定がビッシリと組まれ、そして10日の早朝に国後島を離れ、根室へと戻ってくるのだ。今回は若者主体だが、もし高齢者であれば寿命が縮むのでは？と心配になるほどだ。とある常連参加者によれば、国後島の訪問事業ではホスト役のユジノクリリスク地区行政府が「大いにはりきって」結果的に過密スケジュールを組みがちであるとのこと。「まあ、いつもこんなものですよ」と苦笑していた。

2. 国後島到着まで

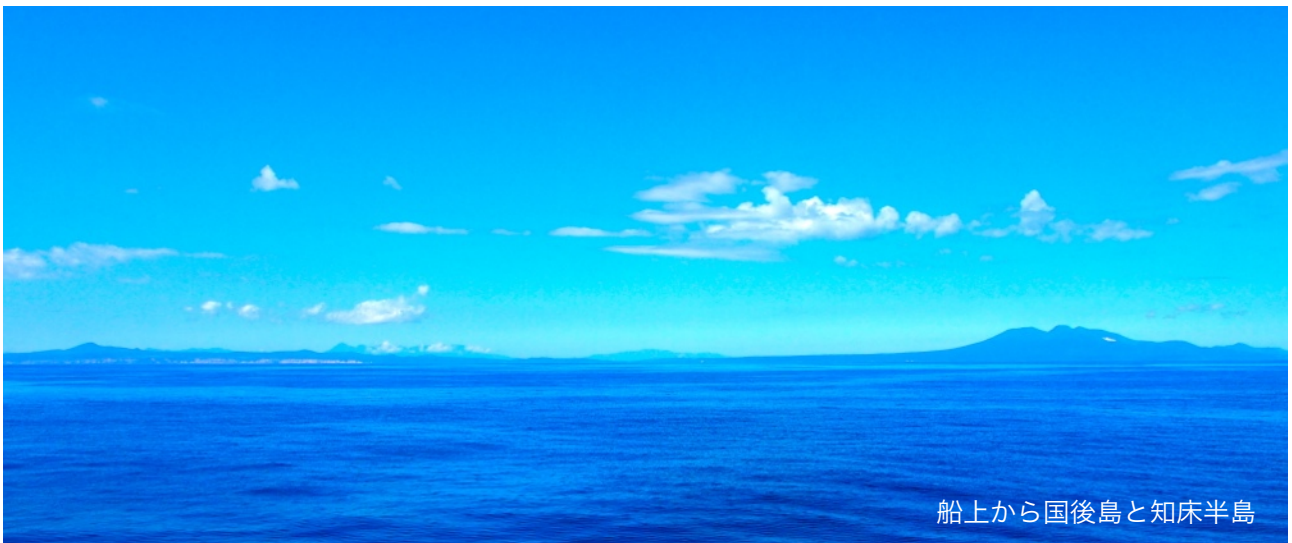
9月7日、いよいよ国後島に向かう。根室港の岸壁では、出発式が執り行われた。団員はいったん船内に荷物を預けたあと、岸壁に戻り番号順に整列、見送る人々や団長の挨拶があり、団員番号順に確認を受けて乗船となる。けっこう、ものものしい。

僕らが乗りこむのは「えとぴりか号」という、2011年に就航したばかりの新鋭船だ。「前の船はとにかく揺れてねえ」と、以前の苦勞を知る旧島民の人々は必ず言う。だが、さすがに新鋭船だけあって、2時間30分の船旅はすこぶる快適だった。ただ、この時の海は文字通りの「べた凧」であったから、もし「前の船」でも揺れなかったのでは？と思わせるほどだった。

そんなわけで、往路ではほとんどの団員は舷側で「夏空でのサマーリゾート」を満喫していた。僕も団員諸兄と談笑しつつ、えとぴりか号の航跡が白々と伸びる海原を眺めていた。すると、イルカの群れが遊びに来た。この海域の豊かさを象徴するような光景だ。団員たちも最初は物珍しげに歓声を上げ、カメラのシャッターを切っていたが、そのうち飽きて見向きもしなくなった。

ただ、イルカにうつつを抜かしている間にどうやら中間ラインを越え、国後島が近づいていたようだ。左舷には青々とした国後島の島影があり、さらにその彼方にはうっすらと知床半島の山並みも顔を見せている。子供の頃と変わらない、おそらくは太古から不変の青さをたたえた光景をみていると、領土問題やらEEZやらに汲々とする人間たちが、いかにも卑屈で馬鹿げたものに思えてくる。

やがて国後の島影は明瞭な輪郭を伴い、切り立った断崖と深緑をたたえた山並みに姿を変えてゆく。そして、前方には古釜布（ユジノクリリスク）が近づいてくる。海に突き出た小さな海岸段丘の上に、2階建ての集合住宅を主体としたこじんまりとした町並みがあらわれた。昔は文字通り灰色一色の姿だったそうだが、今ではちらほらと青やら赤やらが混じっている。この町の人口は6,600人ほどだという。



船上から国後島と知床半島



古釜布(ユジノクリリスク)のまちなみ

さて、いよいよ上陸——なのだが、実は最新鋭のえとぴりか号といえど、港には接岸できない。私たちは古釜布湾内で舢舨に乗りうつり、それで棧橋に向かうしかない。というのも、フェリーを横付けできる埠頭施設がまだ未完成であるからだ。旧島民にとって「いつまで経っても完成しないフェリー埠頭」は、格好のからかひのタネになっている。また、真偽のほどは定かではないが、湾内の海底は沈船だらけであるため、その位置を知らなければ、迂闊に港には近づけないのだという話もある。実際、そこらに沈船の姿が見受けられるのは確かだ。（それはサハリンの港でも同様だが）

とにかく、湾内で立ち往生すること小一時間、国境警備隊や税関職員を同乗させた「友好丸」という名の舢舨がやって来て、えとぴりか号に横付けした。この港には「希望丸」と「友好丸」という2隻の舢舨があり、いずれもいわゆる人道支援の一環で日本が贈ったものだという。友好丸がえとぴりかとのランデブーを済ませると、制服を着たロシア人たちが乗り込んできて、待っていた外務省の職員たちと食堂での「儀式」がはじまった。まあ、要するに入国審査の代わりなのだが、国後島はあくまでも「日本国内」なので、入国審査ではない。ビザなしで日本人の「入国」を認めるロシア側と、特例としてロシア側の「審査」を受け入れる日本側の、双方の面子を保つための妥協の儀式だ。これは、20年に及ぶビザなし訪問事業には欠かせない風物詩なのだが、一般参加者たる僕は同席を認めてもらえなかったのだから、ここで詳細を記すことはできない。

儀式が終わると、ようやく団員に舢舨に乗り移る許可が出る。団員は下船口でまた番号順に整列し、順番に「友好丸」に飛び移るのだ。もちろん、2隻の間には踏み板が渡してあるし、両側から船員さんが支えてくれるのだが、正直言って結構、怖い。——早く埠頭が完成してくれないものか。

3. 国後島に到着して

さて、無事に全員が舢舨に移乗し、とうとう国後島に第一歩を記す時がやってきた。もう儀式は済ませたので、棧橋では税関審査のような面倒な手続きは一切ない。パスポートコントロールのオフィスを素通りして（いい気分！）港口を出ると、現島民の車が列をなして待機している。島内には観光バスの用意がないため、訪問団は島民のマイカーに分乗して島内を移動するのだ。今回僕ら（島民2世のご夫婦と同組だった）がお世話になったのは、サーシャという税関職員のランドクルーザーだった。サーシャは札幌で語学研修を受けたことがあり、少しでも日本語が話せた。柔らかな物腰さが印象的な、恰幅の良い男だった。



国後島友好の家（ムネオハウス）

彼の車が坂道を登りはじめると数分で、目的地である「日本人とロシア人の友好の家」、すなわちムネオハウスに到着した。工事現場の作業員宿舍よりは少しマシかな、という程度の、プレハブ2階建ての宿泊施設だ。ただ、内部の手入れは行き届いていた。いかにも管理人といった風情の、小太りのおばちゃんたちが怠りなく目を光らせているおかげだろう。

ムネオハウスの玄関では民族衣装を身にまとった少女が「パンと塩」をもった少女が待っていた。これは「どんなに貧しくとも、旅人にはパンと塩を分けて迎える」という、古き佳きロシアの伝統だ。「この歓迎行事はね、北方領土がロシア領であるというプロパガンダの一環なんです」

…と、事前研修会で外務省職員が苦々しげに語っていた、その通りの光景だ。それでも、訪問団員はみんな神妙に列をつくり、パンと塩をいただいて館内へ入っていく。確かに、プロパガンダなのかもしれない。でも、それがホスト側の「心づくし」であることもわかる。だからこそ、彼女を無視してはいけないだろう。僕たちの目的はあくまでも、交流なのだから。

ムネオハウスには食堂も厨房もあるが、今回の訪問団の食事を一手に引き受けていたのは、ハウスの通り向かいにあるカフェ《アマデウス》だった。率直に言って、食事の内容は……だったが、辺境のレストランで美食を期待するわけにもいくまい。ただ、地元の食材を使った料理というのは一度食べてみたかった。

…こんなペースで話を進めると、話が長くなり過ぎてしまう。後は手短かにまとめよう。訪問団にはいわゆる常連の人も多い。彼らは島の変化に敏感で、観察も詳細だ。

「昔はね。湾内の至るところに汚い廃船があったさ。でも北京五輪の時に中国人がみんな持ってたんだよね。今残ってるのはね、中国人も買わなかったヤツさ」

「昔の街はホコリだらけで、手入れも行き届いてなくてね。ボロボロでホントに灰色一色だったけど、まあ、だいぶキレイになったよね。舗装道路なんて全くなかったもん」

北方領土の現状を語る旧島民の言葉には、どうしても毒がこもる。それは積年の思いで醸成されたものだが、彼らが今の島民に対して抱く思いは複雑だ。幾ばくかの毒とともに、辺境の島に暮らす人々への共感も伴う。



行政府前広場の少女



アリョンカ幼稚園



東沸墓地

僕個人が見たユジノクリリスクの街並みは、サハリンの、つまりロシア辺境の港町との類似が印象的だった。確かに道内（特に道東）の地方都市は表面的には小綺麗には見えるものの、寂寥感とか空虚感が濃厚に漂う点ではほとんど変わりがなかった。けれど、国後島には確実に一つの長所があった。子供が多いのである。それは新築のアリョンカ幼稚園を視察した際に、案内役の先生が力説するところでもあった。

「クリル社会経済発展計画によって、将来に希望が持てるようになり、出生率が向上し、島内の人口問題は解決に向かっています」「これまで幼稚園は順番待ちでしたが、すっかり解決しました」

今回の訪問団は2グループに分かれ、2日間で13カ所を視察した。このアリョンカ幼稚園に限らず、視察内容には明確なメッセージが込められていた。それは——クリル社会経済発展計画で、私たちは変わりつつある。メドヴェージェフが約束したように、暮らしは上向いてきている——というものだ。例を挙げてみよう。

「クリル発展計画の一つである下水処理場は、アメリカの技術であるバイオパワーによる濾過装置を採用しすでに完成している。今後は、80kmに及ぶ下水道を2014年までに完成させる予定である」（下水処理場にて）

「気象観測所では、昨年自動機器を導入し、3時間ごとにデータを送っている」（ユジノクリリスク気象観測所にて）

「島では20年ぶりに住宅の新築がなされた。12年に5棟、13年には6棟が完成する。2016年までの継続計画ではさらに5~6棟が建設される予定だ」（新型住宅の建設現場にて）

「大統領が視察時に教会堂の新設に言及し、すぐに建設がはじまった。現在はあらゆる宗教的慣例を遵守して新築工事が進められている」（ロシア正教会聖堂建設現場にて）

「大統領が降り立ったメンデレーエフ空港は、1,200メートルの滑走路を備え、ナビゲーションシステムも最新のものに更新された。現在はユジノサハリンスク行きの週5便が就航するのみだが、将来的にはウラジオストクやハバロフスク便も受け入れたいと考えている。もちろん、日本をはじめとする国際便も歓迎したい」（メンデレーエフ空港ターミナルにて）

「港湾エリアに建設中の埠頭旅客ターミナルには3億6千万ルーブルの建設費用が投入されている。1階には待合室と検査場、2階には外国人向けの税関施設、3階には監視用施設が入る予定



メンデレーエフ空港



教会堂の建設現場

だ。建物は年内に引き渡される予定だが、多分ダメだろう（笑）。この工事はなぜか進んでいない」（埠頭の旅客ターミナル建設現場にて）

実際、9日の夜に催されたレセプションの席上で、ユジノクリリスク住民代表は明言した。

「今回、皆様にはこの島がいかに発展を続けているか、島の自然がいかに素晴らしく美しいものなのかをお見せすることができました」

その意味するところは、団員一同が痛感するところでもあった。実際、まだまだ完成途上の施設も多いし、飛躍的な発展とはいいがたい。だが、何とか「社会全体が上昇カーブにさしかかっている」雰囲気は、今の根室や釧路には（おそらく日本全体にも）ないものだった。同時にそれは、返還への道がいかに前途遼遠であるかを思い知らされるものでもあった。帰路における解散式で、訪問団長は「今回の訪問では実効支配が進んでいることを改めて実感しましたし、『もう諦めろ』というメッセージを感じました」「交流事業のありかたに行き詰まりがみえ、もっとやり方を考えるべき」だと述べていた。

北方領土でのビザなしで交流がスタートしてすでに20年になる。当初は問題解決の突破口と期待されていた事業であり、あくまで解決までの過渡期的なプロセスだと認識されていた。だが「まさか20年も続くとは思わなかった」と複数の関係者はいう。団長のみならず、「このままではいけない」と、ほとんどの団員が実感したと思う。

では、どうするのか。

4. 「後ろ向き」外交の限界

それではどんなやり方が必要なのだろう。結論をいえば、まず①「被害者意識」を捨て、後ろ向きの外交姿勢をみなおすこと、②「過去の清算」ではなく、将来を見据えた前向きの交渉をはじめることの2つが必要になるだろう。

先ほど、出発する前日に行われた事前研修会の話題を後回しにしたが、そこでは次のような点が強調されていた。

「日本としては、たえず対話と交渉を続け、返還を願う声をあげ続けなくてはなりません」

「交流の意味は、そこに住む人たちと友好関係を築き、強硬な返還反対論者にならないように環境整備を図ることです」

「訪問団員のみなさんに強くお願いしたいのは、ロシア側の管轄権に服するような行動をしないことです。管轄権を認める事象を積み重ねると、日本側が不利になるからです」



率直に言って、こういう日本の「ディフェンシブ」な対応が事態を好転させるとは思えない。「ロシア側に揚げ足を取られたくない」という心情は理解できる。だが、それが全うできたところで何一つ事態は好転しない。自らの外交予算で訪問事業を続け、その成果が「強硬な返還反対論者をつくらない」ことにすぎないとは情けない限りだ。また、従来のごとく粘り強く対話と交渉を続ければ、いつかは四島返還が実現する——確かにその可能性はゼロではないだろうが、実際はゼロに近い。一方で、国境問題に特有の、安易な妥協を赦さない雰囲気は北方領土にもある。それはなぜなのか。

妥協できない理由の一つには旧島民への配慮に加えて、「日本は被害者だから」という意識があるように思う。北方領土問題の発端はソ連軍の不法な軍事行動にある。だから歴史的な加害者への妥協を認めるべきではないというわけだ。それは心情的には理解できる。しかし、相手を加害者とみなすのは、対等の交渉相手と考えていないのと同じである。日本側がこうした歴史問題に基づく被害者意識を引きずっている限り、結局は北方領土の解決は望めないだろう。現実を直視すれば、こうした歴史論議はどこまでも水掛け論になるだけである。日本の望むような形で意見が一致し、それによってロシアが外交姿勢を大転換する可能性など、考えるだけ無駄である。もちろん、1945年8月における日ソ戦については、今後も研究と検証をすすめ、批判と反省をおこなうべきだ。だが、あくまでも歴史は歴史、外交は外交である。まずは歴史問題と国境問題は分けて考えること、まず被害者意識を捨てることが先決である。

日本が求めるものは、つまりは「(ソ連の過ちに対する)過去の清算」でしかない。要するに、日本側の論理は「すべての発想が後ろ向き」なのだ。そして、その清算が済めばまるでバラ色の未来が待っているかのように思考を停止させるのだ。「返る日、平和の日をめざして」という言葉はまさにその典型だ。現実を直視すれば、仮に四島が戻ってきても、そこからは新たな困難の連続で、ハッピーエンドに直結するわけではないとわかるはずだ。つまり「その後」の経営をどうするのかは、実はきわめて大きな問題であり、そこが他の領土問題と大きく、本質的に異なる点だ。



古釜布市街地からラウス山を眺める

5. 未来を見つめるマスタープランの必要性

周知のように、現在の日本は北方領土・竹島・尖閣諸島と3つの領土問題を抱えている。これらを領土問題として一括化し、外交政策のあり方を大局的に論じる傾向は最近特に強まっているように思う。その視点も重要ではあるが、その反面で弊害も否めない。すなわち、北方領土には、それだけが抱える「固有の問題」があり、マクロ的な視点による総括がそうした特異さへの配慮を失わせているきらいがある。

その北方領土の特異性とは——当たり前だが、それは尖閣諸島や竹島と違い、北方領土には16,000名に及ぶロシア人居住者がいるということである。（竹島の「住人」は韓国の duty workers だから、ここでは居住者とは考えていない。）つまり、北方四島が日本に返還された場合、何らかの形で現島民への対応が必要になるということだ。統治と経営という問題が新たにのしかかってくるのである。

現状で領土問題を一括して論じる場合、その主眼はどうしても問題の解決＝いかに有利な形で国境を画定するのかという点に帰結しがちである。だが、竹島や尖閣ははともかく、北方領土の場合、いわゆるゼロ回答の場合を除けば、境界画定は「統治の回復」という、新たな問題のスタートでしかない。「現在の住民」をどうするのか？ 平均年齢78歳という旧島民の帰還事業は？ また、ほぼ全面的な改修再整備を要するインフラをどうするのか？ 新たな島民を呼び寄せるための地場産業の創生と保護育成方針は？…少し垣間見るだけでも「日本化」への道のりは、果てしなく長く険しいものである。そう考えたとき、「四島一括」が本当に国益かどうかを検証すべきだと気づくはずだ。

しかしながら、かかる諸問題をほとんど無視したままで、北方領土問題は論じ続けられている。公式非公式を問わず、かかる難問に言及されることは極端に少ない。実に驚くべきことで、情けないことでもある。僕が知る限りでは、領土問題解決後の具体的な方針を日本側はほとんど有していない（ようにみえる。もしかして国家機密として存在するのかもしれないが）。

日本は過去に奄美・小笠原・沖縄の返還を経験しているから、その前例を踏襲する形で返還プロセスを策定・実現していこうというのが、大方の予測である。だが、これらの先例よりも北方領土の現実、明らかに深刻で根の深い問題である。官僚的な先例踏襲主義では手に余るだろう。一方の政治家も、残念ながら「戻ってくる島の数」にしか関心が向かない人々ばかりであり、将来的な問題をきちんと把握しているようには見えないし、現今の日本政府のガバナビリティを見る限り、こうした難問を肅々と処理していけるとは到底思えない。

言うまでもないが、北方四島の領有が真の意味で「国益」となるためには、投資を上回る利益が期待できなくてはならない。北方四島には多額の財政投資が必要となる。仮に四島すべてが日本に返還された場合、復帰した領土の面積は千葉県や福岡県に匹敵する。インフラ整備・新旧島民への財政援助・新規移住者の奨励・産業の保護育成など、多岐に渡る事業と予算を要するのだ。それは（特に3・11以後の）日本の国家財政にとって、決して軽い負担とは言いがたい。少なくとも「そんな問題はどうかになる」「どうにでもなる」とたかをくくれるほどの余裕は、現今の国家予算にはなさそうだ。本来、そうした検討を抜きにして、領土の拡大＝国益だと短絡的に考えていいはずがない。

（近年、日本はロシアに対し「領土の帰属さえ確定すれば、返還の時期や方法については柔軟に対応する」と回答している。これを「大幅な譲歩」とみる見解が多数を占めるのだが、本当にそうだろうか。意地の悪い見方かもしれないが、実は「柔軟にしか対応できない」というのが日本の本音ではないか。さらに言えば、譲歩のふりをして、統治にまつわる「やっかいごと」の大半を相手に押し付けようとしているのではないか、とも思える。）

日本が本当の意味で北方領土問題の解決を図るつもりなら、何よりも日ロ双方にとって有益な「返還後の将来像」を提案する必要があると考える。まず、返還後のガイドラインや将来的な目標といった北方領土のマスタープラン（都市計画制度における都市基本計画に近いもの）を示すことだ。そのマスタープランを最も合理的に描ける境界線こそが、「2か3か4か」という問いの答えになるだろう。

その将来像は（当然ながら）現島民やロシア政府にとっても何らかの形でメリットをもたらすものでなければ意味がない。その提案が魅力的なものであってはじめて、現島民が返還を現実的に検討することになるだろう。少なくとも現在進行中の「クリル社会経済発展計画」を大きく凌駕するものでなければならない。もし現行計画と同程度なら、現島民は「返還」に魅力を覚えまいだろう。それに「北方領土に現在居住しているロシア人住民については、その人権、利益及び希望は、北方領土返還後も十分尊重していく」などと日本政府が大見得を切ることもできまい。少なくとも「固有の領土うんぬん」という馬鹿の一つ覚えを延々とくり返すより、その方がずっとましだと思う。

こうした提案の重要性はもう一つある。マスタープランに対するロシア側の意見を問うことで、それ自体を新しい交渉の糸口に、より望ましい北方四島の方向性や今後の日露関係を模索していくきっかけにもなるのだ。それでこそ歴史問題という過去ではなく、未来を語り合うことになる。

逆に言えば、そうした将来像さえも提示できないのなら、日本にはもはや北方領土を要求する資格がないだろう。何の成算も将来への布石もなく「2島だ、いや4島だ」などと数字に固執しても埒があかない。過去に縛られたままで、よりよい地域のあり方を考えずに、真の意味で「解決」することはできない。何よりもそのことを肝に銘じるべきだろう。

***なお、エッセイの内容は、スラブ研究センターを始め、いかなる機関を代表するものではなく、筆者個人の見解です。**